

折に触れ 四字熟語

NO. 191 〔安常処順〕 あんじょう しょじゅん

< 意味 > なんの憂いも抱かず、平穩な生活に満足して、時の流れのままに身をまかせること。また、平穩な生活に慣れ、順調な境遇にいること。「常に安んじて順に処る」と訓読する。

< 出典 > 「莊子」< 養生主 >

・・・適來夫子時也。適去夫子順也。安時而処順、哀樂不能入也。古者謂是帝之鼎解。指窮於為薪、火傳也不知其尽也。

読み下し : たまたま來たるは夫子の時なり。たまたま去るは夫子の順なり。時に安んじて順に処れば、哀樂入る能わず。古はこれを帝の鼎解と謂う。指は薪たるを窮むれども、火の伝わるやその尽くるを知らざるなり。

通 釈 : あなた方の先生がこの世に生まれたのは、生まれるべき時にめぐりあわせたからであり、この世を去ったのは、去るべき必然に従ったまでではないか。時のめぐりあわせに安んじ、自然のなりゆきに従っていけば、いっさいのとらわれから解き放たれよう。こういう境地に達した人間を、昔の人は天帝から首枷を解かれた人間といった。ひとつひとつの薪は燃えつきてしまうが、火は永遠に燃えつづけてゆくのだ。

一 言 : なんの憂いもなく時の流れのままに身をまかせて生きる、 どうしたらそんな生き方ができるのでしょうか。

参照文献 : 徳間書店「莊子」 岩波書店「四字熟語辞典」